概 念 体 の 構 造（2）

――経済哲学のための構想――

浦　上　博　逵

目　次

第Ⅰ章　予備的考察
　第１節　認識の「性質」問題
　第２節　概念体の構造
　　1.　概念体の三層構造
　　2.　相互作用（以上，第 18 号）
第Ⅱ章　三つの概念世界
　第１節　意義の世界
　　1.「意義」について
　　2.　形而上概念とは（以上，本号）
　第２節　論理の世界
　第３節　経験の世界
第Ⅲ章　三つの概念世界の相互作用
　第１節　意義の世界から
　第２節　論理の世界から
　第３節　経験の世界から

第Ⅱ章　三つの概念世界

第１節　意義の世界

1.「意義」について

【概念の「意義」は，記号が指示する対象ではない】 本論文で用いる「意義」という用語の内容を明確化するために最初に取りかかるべき問題は，概念が記号としてなにか実在するものを指示したときにのみ成立しうるのかどうか，ということである。それというのも，概念の内容を尋ねるときに，通常，我々がまず発する問いは，「その言葉（記号）[1] は，何を意味しているのか」という問いであって，「その言葉（記号）は何を意義しているのか」という問いではないからである。そしてその問いが答えられた後に，我々は，「では，その言葉（概念）の意義は何なのか」と尋ねることができるのである。しかしながら，「意味」という語は，それ自体が多様な内包をもち，そのため多様な用いられ方をする[2]。そしてそれがどのように用いられているかによってその論者の立場が判るという点では「真理」という用語と同様である[3]。「意味」と「意義」に

ついての考察は，次のようなフレーゲ（G. Frege）の有名な文章から始めるのが現代では通例となっている。フレーゲは，表現の Sinn と表現の Bedeutung を区別し，「『宵の明星』と『明けの明星』の意味（Bedeutung）は同一であるが，それらの表現の意義（Sinn）は同一ではないということになるだろう。」[4] と述べた。そして記号によって表示されたもの（指示対象，つまり真理値を有するもの）は記号の意味（Bedeutung）と呼ぶことができ，指示対象に与えられる様態（認識上の価値を有するもの）が記号の意義（Sinn）と呼ばれるとした。つまり Sinn は，Bedeutung の与えられ方（die Art des Gegebenseins）であるとされている[5]。『宵の明星』と『明けの明星』というそれぞれの記号の指示対象（=「意味」）は同一であるが，認識上の価値（=「意義」）は異なる。そして続けてフレーゲは「表象」という用語を取り上げて，「意味」と「意義」と「表象」を説明する。彼は，望遠鏡で月を観察している人の例をとり，月それ自身=意味，望遠鏡の内部に投影された月の実像=意義，観察者の網膜上の月=表象，としたうえで，意味はまったく客観的あり，表象[6] はまったく主観的であり，意義は両者の中間に位置すると述べた。こうしてフレーゲにあっては「意味」と「意義」とは切り離され，「意義は，表象ほどには主観的ではないが，他方，対象そのものでもない。」とされる[7]。一方，フッサール（E. Husserl）の立場からすれば，意味とは，意識の作用である意味志向の相関項である。そして意味を付与するものが意識であり，あらゆる実在はこの意識の意味付与（Sinngebung）によって成立するという超越論的観念論のなかで，この意味（Sinn）という用語は志向性の全域に適用されるとした。本論文での「意味」という語はフレーゲよりフッサールに近いものであるが，それでも「意味」の内包は曖昧さのまま残しておくべきであると思う。それはこの用語の有している豊穣さのためであり，それを厳格に定義づけることは「角を矯めて牛を殺す」の例しに倣うことになるからである。ただここで定義したい用語は「意義」という用語であり，それは「意味」とは異なった用いられ方がなされており，指示対象（それがたとえ空の集合であっても）を指示しているわけではない，ということである。

【「意味」という語は，語用論に属する】 通常，記号論理学では，記号とそれが指示する事物や事象との関係が「意味論」と呼ばれており[8]，言語の意味とは，記号が指示するものあるいはその関係であるとされている（=指示対象）。たしかに我々の日常生活では，「机」という記号はそれが指示しているところのある種の家具であるという考えは受け入れやすいし，「机の意味とは」と聞かれたらそのような対象を「意味（=指示）」している場合もある。しかし「意味」をこのように解釈すると，はたしてある記号が指示しているものがいかなるときにもいかなるところでも実際に存在するのであろうかという疑念が湧く。「机」という記号はどの「机」を指示しているのであろうか。具体的に存在する個々の「机」は，「机」という記号によって「意味されているもの」ではなく，「指示されているもの」といった方が正確である。さらにある記号が指示するようなものが心の外にもあるいは内にも存在しないとき，その言葉とそれを含む文は「意

味をもたない」ものつまり無意味なものとなってしまう。例えば「言葉（記号）で指示することのできないものがこの世には存在する」という文は，それが真か偽かは決定しがたいとしても，それが言おうとしていることは理解できる。しかし意味を，記号が指示するものと解釈する記号論理学的な考え方に従えば，この文の主語である「言葉（記号）で指示することのできないもの」は，それが指示するものを持っていないから無意味でなければならないことになる。何故ならもしこの主語が指すものが在るとするならば，そのものは言葉（記号）で指示することができないものでなければならないからである。しかしこの文は，文自体の真偽は別としてまったく無駄な文章ではない。それは真偽が判断されるだけの「意味」を有しているのである[9]。記号が指示するもの（指示対象）が意味であるとして名づけられた意味論という名称は不適切な名称である[10]。むしろ意味の問題は，記号と記号使用者との関係を取り扱う語用論[11]の問題に属するものと考えられている[12]。このような相違は，「意味」を客観側でとらえようとしているかあるいは主観側でとらえようとしているのかという立場の相違に帰因する。実在の対象の存在を前提にし，記号はその代理でしかないと考えれば記号の意味は指示対象ということになるが，記号は実在・非実在も含めて対象をからめとろうとする主観の行為であると考えれば，記号を使用する者とその対象（実在・非実在を含めて）の関係として意味が考えられることになる。物理学的な実在のみを真とみなす実在論者は認識のあるべき当為（Sollen）[13]として前者を主張するが，本論文は後者の立場に立っている。それというのも存在（Sein）としての認識―つまり現に存在する我々の認識をあるがままに見つめるとき―は，実在・非実在の双方に認識の対象を広げているからである。

【意義の世界は主観性の世界である】　真理とは「正しい認識」であり，「正しい認識」とは「客観的知識」であるとするならば，我々は客観物の存在を前提にしなくてはならない。客観物を物理的な事物の実在であるとし，そのような事物の「論理」の認識が「客観的知識」であるとするならば，既述したように[14]，われわれ主観の論理と客観物の論理が一致する保証はいかにして得られるのであろうか[15]。そもそもそれが一致したという判断を下す判断者は何であろうか。この問題を解決するためにはその判断者を他に求めてもそれは徒労に終わざるをえない。それというのもその判断者は，それを探し求めている自身の内にいるのであるから。その問題に対処するには問題の立て方を変え，「我々の主観の論理と客観物の論理が一致したという確信を我々はいかにして得るのか。」と問わなくてはならないのである。このように問題を立てれば，認識論研究は，事物に関する研究ではなく，主観に関する研究へとその矛先を変えることになる。こうして本論文は，第１章で述べたようにフッサールの主観主義の立場を採用することになり，それによって概念による認識とその構造の分析という当初の問題の道が開かれることになるのである。その主な理由は，概念は，主観側に発生するのであって客観側が概念を有するということはない，という単純な事柄に基づく。そのことからして概念にとって実在の存在は，決して必要条件でも

なければ十分条件でもない。概念が実在と関わりをもつのは，概念の担い手としての実在者（身体）を通じて他の諸々の実在を確かめることから生じるのであるが，このことについては経験概念を取り扱うさいに詳述することになるであろう。ここで再度述べておきたいことは，一部の記号論理学で主張されているように，概念（記号）の「意味」は指示対象であり，指示対象を指示しない概念（記号）は無意味である，と限定することは「意味」という用語をあまりにも矮小化してしまうことになるということである[16]。概念（記号）は，主観性においてのみ形成されるのであり，真・偽も正・不正もこの場所（主観）で生じるのであり，それらをいかなるものと見なすかもこの場所（主観）でおこなわれるのである。それ故，「意義」あるいは「価値」という姿をとる概念もここで生じる[17]。「意味」という用語の最も広範囲な用い方をすれば[18]，それは「意義」とか「価値」という用語をも含み込む 。ここではこのような広汎な「意味」からある部分を切り取り，それを「意義」と呼ぶことにする。

【「意義」という用語の内包】 ここで「主観」とは，自己内の主観（反省する主観つまり対自主観も含めて）であり，「意義」とは，本来，そのような諸主観の間の共通了解を獲得するための要件であり，このような了解[19] の構造のなかで形成されるのである。了解の構造とは，主体が「意味」をどのように形成し[20]，どのように他者たちと関係するのか（「意味の関係」）ということである[21]。例えば記号の「意味」が指示対象であるとしてもそれは主観の間（対自主観も含めて）でのみ意味がある。逆の言い方をすれば，主観にとって「意味がない」対象が記号化されるであろうか。そしてこの「意味の関係」のなかでとくに「価値」・「善悪」・「美醜」といった判断を含んでいる部分がある。これらは「生との関係」[22] のなかで意志作用によって色づけられるものであり[23]，これらが「意義あるもの」の内容であり，世界観[24] として表現されたものである。

【自我は，意義づけを求める】 概念の形成が主観の場においてなされるため，その概念のうちには，「生」的な自我という主観（今後は「生的意志自我」と呼ばれる）がそれ自身に意味づけて形成する概念がある[25]。そしてそれらの概念は生的意志自我の意志作用によって経験概念（後述）から醸成されるのである。この生的意志自我が形而上概念を形成するという作業は，我々が「生」を得たときから「生きる」ことの意義をもたされるという出来事から生じる。別の言い方をすれば，生的意志自我は，死の恐怖から逃れることに端を発し，自己の生や死について肯定的な意義をもたせようとするのである[26]。ここで意義は当為となって現れる。意義の世界は当為の世界であり，それはわれわれの意志作用による当為の世界としてその存在を有するのである[27]。

【意義は「生」に結びついている】 上述のようにモリスによれば，語用論（pragmatics）とは，記号とこれを解釈し使用する人間との関係であり，その用語は，プラグマティズム（pragmatism）を視野に入れてつくりだされたものである。元来，プラグマティズム（pragmatism）[28] とは，概念（記号）をあたえられた者は，その概念の対象（指示対象）に操作をくわえることか

ら得られる結果によってその概念の意味（解釈項）を明晰にすることができる，と主張するものであった。しかしモリスは，「ほとんどの記号がその解釈者としての生き物を持っているのであるから，語用論は記号過程の生物的側面つまり記号の働きに生じる心理学的，生物学的，社会学的現象のすべてを扱うといえば十分正確な語用論の特色づけになるだろう。」[29] と述べる。つまり概念の解釈者はこのように生命体であり，生命体にとっての概念の意味とは，その生命体上に生じる効果である[30]。生命体に生じる効果で「意味あること」ということは「生命体の維持」つまり「生きる」ことに関することである。ここで「意味」ということが「生に対する価値」を内包し，「生きる＝生の肯定」[31] に結びつく。しかしながら「意味」という用語を「価値」に結びつけて[32] このように限定することは，既述の「意味」を対象の指示対象に限定して用いることと同様に「意味」という用語を矮小化してしまうことになる。そこで「意味」におけるこの部分に「意義」という用語をあてておこう。そうすると，概念のなかで「意義[33]」を有する概念（形而上概念）は「生の肯定」という価値を根源に有しており，それは概念の使用者としての生命体のなかで，ある種の概念（経験概念）に「生の肯定」という酵母を綯い交ぜることによって醸成されるのである。後に詳述することになるが，ここで，なんらかの共同体も「生命」を有する「生命体」とみなされることを述べておかなくてはならない。つまり「生命」は必ずしも「生物的生命」だけではなく，社会学的な「有機体的生命」も含めて用いている。経済学における形而上概念の存在を指摘しようとする本章の目的のひとつは，経済学における学的共同体が「生命あるもの（有機体的生命）」として存在することであり，そしてその生命の核は形而上概念である，ということなのである。

【意義付与作用】 このように形而上概念をとらえると形而上概念が有している基本的な作用が剔出できる。形而上概念は基本的には意義付与作用を果たす。現象学的な用語を用いれば，形而上概念は「ノエシス的契機」（意識が対象に対して志向する）によって対象を統握し，対象に意味（意義）を付与することにより対象を生気づける（beseelen）という作用を有している。つまり形而上概念は，対象に注意を向けながら，それが「生の肯定」との関係で何であるかを規定しようとするのである。現象学的な「本質直観」によれば，「…とは何か」という問題を明らかにする手順は次のような操作に従う。つまり，⑴ある「ことがら」についてエポケー（Epoche）を施し，⑵それが自分の生にとってもつ「意味（意義）」を内省によって取り出し，そして⑶この取り出された意味（意義）が自分にとってだけではなく，他のさまざまな人間にとっても妥当するかどうかをいま一度内省（想像変容）を施して，この意味本質を人間一般にとって妥当するものとして取り出すのである[34]。しかしながらすべての概念がこうした手順を経るのではない。「生」とはまったく関係をもたない概念もわれわれは有している（これらの概念については後述）。「本質直観」という篩によって取り出された概念はすべての概念のなかの一部であり，それは「意義」的に普遍妥当性を獲得しようとする形而上概念なのである。

2. 形而上概念とは

【「形而上」という用語は，概念体系化における超越的基礎づけという意味にあてられる】 形而上学という用語は，アリストテレスの著作編集のさいの分類テーマから生じて[35]以来まさに幾多の内容を有して展開されてきた。そしてどのようなすべての哲学的研究も，肯定的にしろ否定的にしろ，形而上学に関わってきたのである。その主たる理由は，もともとは形而上学が存在者一般を基礎づける学問分野とみなされてきたからである。そしてその後，認識論が存在論から腑分されたときにもまた形而上学は認識一般を基礎づける分野とみなされてきたのである。形而上学についてはここでは触れないが[36]，本論文で「形而上」[37]という用語を用いた最も単純な理由は，概念体系化の超越的な認識論的基礎づけという役割を名指すためである。そして「超越的」とは，カント（I. Kant）の用語を借りれば，「可能経験を超えて」ということである[38]。

【「形而上概念」とは，概念体に含まれるある種類の概念の名前である】 概念体とは，いくつかの異質の概念から構成されている知識の集塊（conglomerate）体である。形而上概念とは，そのような概念のうちでその概念体の基礎づけを担おうとする概念のグループにつけられた呼び名である。我々の概念は，三層構造をしているが[39]，概念体のカテゴリー的な基本概念を構成しているのがこの形而上概念である。例を挙げれば，物理学における物体・量・質・因果といった基本概念がそれにあたる。また経済学においてその例のいくつかを示すとすれば，ロビンソン（J. Robinson）がその著『経済学の考え方』で提起した[40]，古典学派の「価値」という概念，新古典派学派の「効用」という概念，ケインズ派の「雇用」という概念をあげることができるであろう。

【形而上概念は，諸概念を体系化する「綱領」を設定する】「形而上」的探求は，普遍妥当的な学問的認識の中で世界を解明するという要求をつねに有している[41]。つまりそれは現象に即して獲得される概念でない。なぜならば概念体の基礎づけという活動は，個性記述的ではなく，体系化を企てるために必然的に普遍性を内包しているからである。しかしながらまたその普遍性は論理的な普遍性ではない。「生」に（存在論的に）妥当して「生」において（存在論的に）普遍的でなくてはならないのである。つまり「生」自体に妥当しているから普遍的でなくてはならないのである。なぜならば，現存在の「生」は不死を希求するからである。そしてそれは価値と呼ばれることになる。こうして普遍妥当性を目指す形而上概念[42]は，それ自体としては，感覚的に認知することはできない（超越的）が，諸概念を体系化する「綱領」を設定する。「綱領」とは，概念の体系をひとつのまとまった概念体にセットする原理である[43]。そしてこれら形而上概念は，「（有機体的生命をも含めた）生の肯定」を目論む生的意志自我が意志作用を行使して普遍妥当性を獲得するために構成されるのであり，その普遍妥当性とは，「（有機体的生命をも含めた）自己の生の肯定」を押し広めようとする精神的な権力の獲得にほかならないのである。これこそが価値なのである。

【形而上概念は「意義」を包含する概念である】 精神の知的探求の活動としての形而上概念は，こうして「生の肯定」に根ざした普遍妥当性を目指し，その結果，権力の獲得を内包した「意義」を包含する概念であるため，「生の肯定」から「権力」に向かう心的連関の流れに浮かぶ概念なのである[44]。こうした流れのなかにある形而上概念の普遍妥当性とは，二重の意味において「力への意志」を内包しているのである。それは後に詳しく述べるが，「自己の生」に妥当性をあてようとする当初の試み（「自己の生に」対する力の獲得）が，やがては自己以外のものに対して「自己の生の妥当性」を敷衍する意欲（「他の生」に対する力の支配と増大＝権力の獲得）に駆られ普遍性を目指すことになるのである。

〈注〉

（1）「指示語」・「言葉」・「記号」・「概念」がそれぞれどのような内包ないしは外延を有しているかはおおいに問題のあるところであるが，当面は，「指示語」は，実在する指示対象を有する記号（「非指示語」は，非実在的な対象を指示する記号）であり，「概念」は指示語と非指示語を含み，「言葉」とは言語形式を備えた記号で，それらをすべて含むものとして「記号」を考えている。そして「記号」とは表現の代理物（ときには「記号」自体が代理物以上の働きをもつこともあるが）である。しかしながらこのような区別は暫定的なもので絶対的なものではない。もともとこれらの用語は厳密には規定されないものであるどころかむしろこれらの用語は曖昧に用いられるべきだと思う。というのも，我々はこれらのものを，いつもそしていかなる所でも厳密に用いるというようなことをしていないからである。例えばモリス（C. Morris）が記号過程の構成要素として指示対象という用語を用いたときには，外延のない空の指示対象のグループも存在するとした。そのためモリスは，指示とは異なる別の用語を必要とし，外延を「現示対象」と規定したのである（[25] pp. 10-11）。この主張の意図は，記号の意味は指示対象であり，その指示対象がたとえ存在しなくとも「記号の意味」規定は成立すると主張することにある。しかしながら，「この記号の指示対象は存在するがその外延は空である」というよりも，「この記号の指示対象は存在しない」という表現の方がより日常的な言い方である。そしてそれであってもそのような記号も記号として存在しうる。それというのも記号が成立するためには，意味（とくに「指示対象」としての意味）は必要条件ではないからである。重要なことは，曖昧さは残しながらもそれらが用いられるときの文脈でそれらを明瞭にすべきである。このことを後期ウィトゲンシュタイン（L. Wittgenstein）は「言語ゲーム」という着想のなかで次のように述べる。「或る語の意味とは，言語ゲームに於けるその語の使用（Gebrauch）である。」（[3] p. 33〈43〉）つまり用語は，その言語ゲームのなかでゲームの規則にしたがって明確化されるのである。ゲームが異なればその用語の内容も異なる。例えば，将棋を指しているときの「王将」と歩上がりを楽しんでいるときの「王将」とは，指示対象としての駒は同一であっても，「王将」の意味は異なるのである（[追記] アリス・アンブロース編『ヴィトゲンシュタインの講義Ⅱ』野矢茂樹訳　勁草書房，1991 年 pp. 79-88）。

　またこれらの区別は，語の区別ではないことも当然である。例えば，この「机」という語は，実在のある机を指示するときには指示語として用いられているが，机一般を意味するように用いられているときには概念として用いられているのである。

（2） オグデン=リチャーズ（C. Ogden & I. Richards）によれば，「この教訓とは何であったか，学ぶべき教えとは何であったか。それは簡潔に次の形で表せる――語が重要であればあるほど，ますますその意味は曖昧になるようであるということ，これである。もっとも当てにならない語が常に基調語となる。」（[7] p. 2「日本語版のために」）そして彼らはまた，「意味」について「意味研究家が採択し

ている主な定義の代表的な見解」を表にして 16 個の「意味」の定義を掲げている（[7] pp. 262–263）。しかしながらここには「価値」を含んだ定義が見当たらない。「価値」に相当する定義で最も近いものは「情緒」であるが，例えば我々が，「生きることに意味がある。」というときの「意味」には「情緒」以上のものとしての「価値」の意味を含めているのである。さらにモリスによれば，「『意味』は，或る場合には指示対象を，また或る場合には現示対象を，ときどき解釈項を，或る場合には記号が含意するものを，或る用法では記号過程という過程そのものを，またしばしば意義や価値を表わす。」（[25] p. 73）とされている。

（3） 例えば現代の記号論理学のある立場の人々は，「p は真である」というかたちでの「真（偽）」という言葉を不必要なものと主張さえする。例えばエイヤー（A. Ayer）は，「そこで我々は，普通考えられているような真理の問題は存在しないと結論する。」（[29] pp. 88–89　訳書 pp. 98–100）と述べる。

（4） [20] p. 5

（5） [20] p. 10　フレーゲの言説をさらに続ければ，「まず私がここで『記号』や『名前』として理解しているものが固有名の役割を果たすなんらかの表示手段であることと，それゆえに，その記号法の意味は特定の対象（ただし，この語を最も広い意味において理解するとして）であり，他の論文でさらに詳しく検討するはずの概念（Begriff）や関係（Beziehung）ではないということである。」（[20] pp. 5–6）また彼は，「今，もし，a＝b ならば『b』の意味は『a』の意味と同一であり，したがってまた，『a＝b』の真理値は『a＝a』のそれと同じである。しかしそれにもかかわらず，『b』の意義は，『a』の意義とは異なり，したがって，『a＝b』において表現されている思想も『a＝a』で表現されている思想とは異なる。つまり，この場合には，二つ文が同じ認識上の価値をもつことにはならない。」（[20] p. 39）と述べる。このようにフレーゲは「意味（Bedeutung）」と「意義（Sinn）」を峻別し，前者は指示を，後者は様態を示すとされているが，その分類法に従うならばフレーゲの用いる「意味」はむしろ「指示」と呼ばれるべきものであろうと考えている。それは「意味」という用語を不当に狭い用い方に閉じ込めているからである。

また末木（剛博）によれば，「フレエゲでは命題の『意義』はその内包であり，思想（Gedanke）である；また命題の『意味』は，真理値（Wahrheitswent）である。」（[2]〔II〕p. 27）しかしながら一方，ウィトゲンシュタインは，このような定義ではこれらの概念を用いておらずそれらにいくつかの内容を与えて用いている（[2]〔II〕pp. 27–29）。なおここで，“Sinn” と “Bedeutung” という語をそのまま用いたのは，ドイツ語のそれぞれに「意味」という語と「意義」という語のどちらをあてるかに関して訳語に混乱がみられるためである。

（6）「表象」という用語も哲学上曖昧な用語の一つである（[5] p. 37 注 33，を参照）。そしてその不安定さは，デカルト（R. Descart）的二元論の不安定さから発生しているのである。ちなみにデカルト的二元論の不安定さとは，「世界のなかで存在するものとして見いだされるいっさいは物質的なものであり，しかもその世界は，われわれの意識にとっての認識対象として規定されるかぎりで存在する，という，矛盾のふくんだ体制である。」（[28] p. 232）このような不安定さの解決のため，認識過程に「表象」を導入した表象主義の立場に立てば，「知覚されたもの」は「表象」されることによって「物」と分離されることになり，二元論が発生する。そしてこの「表象」を「意識」と見なせば合理主義となり，それから先は主観主義への道を歩み出すことになるが，その一方で，生理的な「感覚所与」と言い換えればセンス・データ論者となり，それは帰納主義的に処理されることになる。また「表象」を否定した立場としては，「主客未分」としての大森（荘蔵）哲学における一元論にその好例を見いだすことができる。大森哲学の立場は，[『表象』のような仲介者なしに『対象』はじかに立ち現われると見る所にある。」（[6] p. 120）そして「そこに『意味』とか『表象』とか『心的過程』とかの仲介者が介入する余地はないのである。すなわち，言葉（声振り）がじかに『もの』や『こと』を立ち現わしめるのである。言葉の働きはこの点において，まさに『ことだま』的なのである。」（[6] p. 125）このような大森の一元論は，「『表象』と誤解されて来たものを，物へ，世界へと『返

還』することが試みられ」（[24] p. 79）る方向へ向いているのである。しかし同じ一元論ではあるがそれと反対の方向（意識に向かう方向）の例をあげれば，西田（幾太郎）哲学のそれである。西田哲学の定礎は，知覚あるいは感覚としての「純粋経験」であり，「純粋経験は直接経験と同一である。自己の意識状態を直下に経験したとき，いまだ主もなく客もない。知識とその対象とがまったく合一している。これが経験の最醇なるものである。（略）真の純粋経験は何らの意味もない，事実そのままの現在意識があるのみである。感覚や知覚がこれに属することは誰も異論はあるまい。しかし余はすべての精神現象がこの形において現われるものであると信ずる。」（[16] p. 93）と述べる。またベルグソン（H. Bergson）哲学の一元論の立場はこの両者とも異なり，すべての存在は，実在論者の「物（chose）」と観念論者の「表象（représentation）」の中間に位置する半ば物的，半ば心的な「イマージュ」であるとする。このように「表象」を否定する一元論者においてもその足場は多様なのである。

（7）［20］p. 5

（8）モリスによれば，「記号と記号を適用できる対象との間の諸関係を研究することができる。このような関係は記号過程の意味論的次元と呼び，（略）この次元の研究を意味論と呼ぶ。」（[25] p. 12）

（9）ここの論旨は沢田（允茂）に拠っている（[10] pp. 47–48）が，私の立場もまったく同様である。

（10）クワイン（W. Quine）によれば，「アリストテレスにとっては，ものは本質を有していた。しかし，言語形式のみが意味を有するのである。意味とは，指示の対象から切り離されて語と結び付けられた本質のことである。」（[9] p. 34）また後期ウィトゲンシュタインによれば，「ここで大切な事は，もし人が或る名前の『意味（Bedeutung）』という語でその或る名前に『対応』しているものを表わしているならば，『意味』という語は誤用されているのだ，という事を確認する事である。もし人が或る名前の『意味』という語でその或る名前に『対応』しているものを表わしているならば，彼は名前の意味と名前の担い手（Träger）を取り違えているのである。」（[3] p. 32〈40〉）

（11）モリスによれば，「研究の主題を記号と解釈者との間の関係にすることもできる。このような関係は記号過程の語用論的次元と呼び，（略）この次元の研究を語用論と名づける。」（[25] p. 12）続けてプラグマティズムの伝統に属するモリスは，次のように述べる。この「『pragmatics（語用論）』という用語は明らかに『pragmatism』という用語に関連して作り出されたものである。pragmatism の不変の意義は，それ以前にもまして詳しく記号と使用者との関係に注意を向けたこと，知的活動を理解するのにそのような関係が関連してくることを深く評価したことにある。『pragmatics（語用論）』という用語は，記号学におけるパース，ジェイムズ，デューイ，そしてミードの業績を目立たせるのに役立つ。同時に，特に記号学的な用語としての『pragmatics（語用論）』はそれ自身の定式化を受け取る必要がある。『pragmatics（語用論）』という語で表わされているのは記号とその解釈者との科学である。」（[25] pp. 51–52，但し，訳の一部は引用者による）

（12）［10］p. 48　私の立場もここにある。

（13）「当為（Sollen）」という表現を用いたのは，実在論者が最も忌み嫌うその立場に実在論者自身が往々にして陥っていると思われるからである。

（14）［5］pp. 25–26

（15）これを言語論的に言い換えれば，我々の言表（言語的表現）が対象界をあるがままに表現したものであるというためには，言語と世界とが一定の形式を共通のものとしている，ということが成立していなくてはならない。例えば前期ウィトゲンシュタインにおいては，「像（Bild）」は物差しのように実在に当てられる（[2]〔Ⅰ〕T2. 1512）こと（写像関係）が前提とされている。そしてその「像」は『論理哲学論考』においては「命題」と代置されるのである（[2]〔Ⅱ〕pp. 29–30）。これに対して ヴィンデルバント（W. Windelband）は，すでに「この真理概念［真理はあらゆる場合に於て表象と実在との一致に成立する：引用者注］は人間の表象と，表象が自己の対象として係るべき実在との間の模写といふ関係を前提している。即ち吾々はこれに於て恐らく素撲的世界観の最も完全な表現をみる。」（[4] 第一部 p. 219）として「模写説」を批判しているのである。ウィトゲンシュタイン

の場合の「像」とは，実在的世界が自己を自己の内に写すときに現れてくるもので，例えば音符は音楽の像であり，地図は地形の像であり，命題は事象の論理像である。「像」と「表象」（ヴィンデルバントの場合は，我々が諸事物に対して抱くもの）の相違によってまったく異なった立場が主張されるが，しかしここに本来の相違はあるのであろうか。私には，「像」・「表象」のどちらも実在の代理として認識論的に措定されたものであると思われる。

（16） ただし，モリスによれば「指示対象は，ものではなくて，ものの類ないしクラスであり，クラスは多くの要素を持っていたり一つの要素を持っていたり，あるいは要素をまったく持っていなかったりする。現示対象とはそういったクラスの要素のことである。」（［25］pp. 10-11）として「指示対象」を記号過程を構成する関係項の用語として用い，現実の存在者を表示する用語としては「現示対象」という用語をもちだして使い分けることになる。

（17） 竹田（青嗣）によれば，「現象学は『正しい世界認識』の方法を見つけ出すという仕方でこの難問を解いたのではありません。そうではなくて，まずこの課題が原理的に不可能であることを明らかにしました。そして，そのことによってこの難問の背後に隠れていた哲学本来の課題をはっきりとつかみ出したのです。その問題とは，『真理』をいかに認識するかではなく，『意味』や『価値』の原理をいかに了解するかということなのです。」（［11］pp. 9-10）また彼は次のようにも述べる。「『主観ー客観』問題は哲学にとって仮象の問題にすぎない。人間が紡ぎ出す『意味』や『価値』についての探求である。これがフッサールの最大のメッセージですが，（省略）」（［11］p. 21）

（18） 例えば，数の概念は直接には指示対象を持たないし，またなんらの価値観を持たないが，認識上は「意味」がある。たとえそれを「擬似命題」と呼ぼうとも。

（19）「了解」という用語についてボルノー（O. Bollnow）によれば，ディルタイ（W. Dilthey）は「生の理解（Verständnis）」を彼の体系の最も重要な概念として使用しており，「了解（Verstehen）」に次のような定義を与えた。「われわれは，生が感覚的にすでにあたえられている心的生の表出から認識へと到達する過程を，了解と名づける。」（［22］p. 330）そして「理解［了解：引用者注］に際して対象として与えられるものはつねに生の表われである。」（［13］p. 174）とする。また同様に，ハイデッガー（M. Heidegger）においては，「情状性［気分：引用者注］」とともにこうした存在［『現』の存在：引用者注］を等根元的に構成しているのが，了解にほかならない。」（［19］p. 263）とされている。

（20） ディルタイは，意義について次のように主張する。「私は意義とは主体の全体性と関連するものであることを，どうしても主張したい。そういう意義といわれるものは，部分と全体とに関係があると主体に思われるあらゆる関連と同義なのであり，（略）一般化していうならば，意義とはまさにある全体に属していることなのである。」（［13］p. 207）つまり，ディルタイの「生の哲学」体系における「意味」とは，生の流れの中での最小の統一〈単位〉である「体験」を生の全体に結びつけるものであり，こうして「生の連関」は「意味の連関」となるのである。また竹田は次のように述べる。「人間は動物とは本質的に異なった『意味の関係』の世界に生きているわけですが，これは人間社会の『意味』の秩序は人間的な『価値』の秩序を支えとして編み上げられている，と言うことができます。たとえば，人間にとって穀物や木の実は空腹を満たすものとしての『価値』を持ち，したがって『食物』という『意味』を持つけれど，肉食獣にとっては穀物や木の実は，その『価値』も『意味』も違ったものになる。同様に，人間にとって，具体的な日常生活の領域以外の多くのことを『知ること』（〈知〉，勉強，学問），社会的なルールを学び，これを守る理由を知ること，スポーツや芸能に通じること等々は，生きる上で重要なアイテムであり，だから重要な『意味』を持ちます。そして，こういった人間的な『価値』の秩序は，『世界それ自体』からもたらされるのではなく人間の『心』の原理から発するものです。こう考えると，人間にとって世界とは，各人にとって固有の『価値』と『意味』の秩序を持つものであり，だからこの固有の『価値』と『意味』の秩序の構造こそ，哲学者たちが探求しようとした『世界』の本体だということが分かります。」（［11］p. 117）私は，「意味」のなかでこうした「生の肯定」から生じている部分をとくに「意義」と呼んでいる。

(21)　このことをボルノーは，ディルタイ解釈に触れながら「われわれは，生，つまり自己自身の生と他者の生に対して，了解しながら関わっている。そして，この交渉は，自然認識そのものには妥当しない自己自身の範疇によって遂行される。」（[22] p. 82）と述べる。

(22)　ディルタイによれば，「哲学は世界の内に於てではなく，人間の内に認識の内的連関を求めねばならぬ。人々が送ってきた生――それを理解することが今日の人間の志望である。」（[14] pp. 11-12）

(23)　大森によれば（表象主義を批判した「素朴実在論」の立場からは，「確実性」の根拠を求める現象学的立場には与しないが〈[24] pp. 80-81〉），「この組織［「立ち現われ」が組織化されたもの：引用者注］は『真理』や『実在』の観点から組織された組織ではなく，生きるために賭けられた実践的組織であり，この生きんがための組織が『真理』とか『実在』とか呼ばれるのである。真理や実在によって生きるのではなく，生き方の中で真理や実在が選別的に定義されるのである。」（[6] p. 153）そして私はこの「選別作用」が「意志作用」だと考えている。

(24)　ディルタイの終生の研究テーゼは，「世界観の究極の根底は生である。」（[14] p. 13）ということであった。その「世界観」とは，現実の把握である「世界像」と，それによってとらえられた諸事物に付属する諸価値の把捉である「生の経験」と，その把捉された価値の実践である「生の理想」という三層によって構成されている。但し，ボルノーはここにディルタイの不完全さを見いだすが（[22] pp. 146-151）。ボルノーによれば，ディルタイのこのような構造を有する「世界観」は，「気分」（これは，ハイデッカーが人間的現存在の「根本情状性（不安）」（[19] 例えば pp. 537-538）と名づけたものに類似している）から生じてくるのである。つまり，「強い印象というものは，すべて人間に生を独特な形で示す。これよって世界観が新しい照明のもとに照らし出されるのである。そして，このような経験がくり返され，結合されることによって，生に対するわれわれの気分が生じるのである。生全体が，感じ易い魂や思い悩む魂によって，脚色と解釈を得るのは，それが特定の生の連関から見られるからである―普遍的な気分はこうして生じる。」（[22] p. 165）そしてこの「感じ易い魂や思い悩む魂」は，宗教的，文学的，哲学的天才達であり，彼らによって単なる気分は恒常的な現実解釈へと固定され，世界観として定着させられるのである（[14] pp. 18-20, [22] p. 167）。

(25)　ここでの「自我」とはデカルト的な認識主観としての自我ではなく，「生」という衝動をもつ存在論としての自我であり，それ故ディルタイの用語を用いれば，「心的生の本来の中心」としての「意志，労働，欲求，満足は，永遠に回帰する求心的な要素であり，これらは精神的なできごとの土台をなしている。」（[22] p. 110）ようないわば衝動的な自我であり，私はそれを生的意志自我と呼んでいる。そしてその意志はたんなる自己保存を図る保身的な「生きんとする意志」からすすんで肯定的なつまり「生の支配と増大を目論む意志」であり，ニーチェ（F. W. Nietzsche）の言葉を借りれば「力への意志」である。またニーチェにとって「真理とは，それなくしては特定種の生物が生きることのできないかもしれないような種類の誤謬である。生にとっての価値が結局は決定的である。」（[15] p. 23〈493〉）

(26)　竹田によれば，ニーチェは，「世界がそれ自体『客観』として存在するという考え方を強い力で否定しました。『客観』とか『現実』などというものはすべて人間の生への意志（力）による解釈にすぎない，といったのです。」（[11] p. 16）またディルタイは，「死」について次のように述べる。「生殖，誕生，成長及び死が一切の不可解の中心点である。生けるものは死について知っているが，しかし，死を理解することは出来ぬ。死者を見たときから死は人生にとって理解すべからざるものなのである。さうして吾々が世界に対して何か他のもの，異様なもの，または恐ろしきものに対する如き態度をとるのは，何よりもまづ此処に基いている。従って死といふ事実の中には，この事実を説明する想像的観念を強要するものがある。死者の信仰，祖先の崇拝，死者の祭祀が宗教的信仰や形而上学の基礎観念を生む。」（[14] pp. 17-18）と述べる。さらにハイデッガーの「本質的な現存在」とは，死と決断を求める現存在であり，「現存在にふさわしく死が存在するのは，死へとかかわる実存的な存在においてのみである。」（[19] p. 387）

(27)　リッケルト（H. Rickert）は，「要するに不許不は認識の対象であり，そして吾々がこれに従属す

る限り思惟は一の認識となるのである。」（[27] p. 114）と述べる。このように，存在に対する当為の論理的優位を主張するリッケルトにとっては，意味は存在の前にあり，認識は主観の判断作用を中心に展開するのである。

(28) [5] p. 40（38）

(29) [25] p. 52

(30) ボルノーによれば，ディルタイは，「意味は特殊な形の関係であり，これは，生の内部で生の部分が全体に対してもっている関係である。」（[22] p. 285）と主張する。

(31) 但し，それはときにはショーペンハウアー（A. Schopenhauer）のようなペシミズムやニーチェが描き出したニヒリズムのような姿で生じることもある。

(32) リッケルトによれば，「意味や意義の了解といふことは価値を顧慮しないでは科学的には無規定である」（[26] p. 52）

(33) ディルタイは，「意義こそ生をとらえるための包括的な範疇である。」（[13] p. 210）と述べる。

(34) [11] p. 91　現象学方法では「本質直観」とは別に「知覚直観（例えば，音声）」があるが，それは経験概念に属するのである。「本質直観（例えば，その音声の一般的な意味作用＝その音声の個別的な意味ではなく，その音声がただ単なる雑音ではなく何らかの意味をもっているということ）」によって形成された概念こそが形而上概念に相当するのである。しかしながら現象学の場合には，「本質直観」は，一般的な意味作用として不変・共通な意味部分を指しており，それが具体的には人間同士の共通了解の部分を保証することが既に前提にされており，論点先取の誤謬を犯していると思われる。私は，むしろそのような一般的共通了解（＝本質の認識）が成立することに疑いを抱いている。したがって私がフッサールに追随できるのは，本質ということを取り出そうとする意味作用自体（私の用語法では，「形而上概念を形成する生的意志自我の意志作用」）が一般的に存在するというところまでである。またフッサールによれば，「すなわち，すべての実在的統一は『意味の統一』である，と。意味の統一というものは，意味付与的な意識を前提し，この意識の方は，絶対的であり，それ自身がふたたび意味付与によって存在するのではない。」（[18] p. 238）こうしてフッサールは，さまざまな知覚の体験流（表象の継起的流れ）から，そのつど意識の志向的統一によって「構成された経験」が与えられることになるが，この志向的統一を「意味統一」とか「意味付与」と呼ぶのである。

(35) [1]（下）pp. 384–431，を参照。なお，ta mete ta physika というギリシャ語に当てられた日本語の「形而上」という訳語は，『易経・繫辞』にみられる「形而上者謂之道，形而下者謂之器」という文から井上哲次郎によって採用されたが，「道」が，有形有体の現象を超越した無形のものを意味し，しかもそのうえ普遍妥当性を目指しているという意味を併せもっているならばまさにここでの文脈に適合した言葉である。

(36) しかしながら，「形而上学」について本論文が解釈している立場にもっとも近いものをひとつ挙げるならば，次のような立場である。「科学一般と対比してどこに特色があるか。一口でいえば，形而上学が問題にするところは，さまざまの科学によって説明されることがらの，人間にとっての意味である。」（[28] p. 242）

(37) 通常の用語法に従えば，「形而上学」という用語を用いることになるが，本論文では概念体系における概念の分類名としてこの用語を用いるため，あえて「形而上」という不慣れな用語をあてた。

(38) カントは「超越的（transzendent）」という用語をいくつかの意味で用いているが，ここでは次のような文脈のときの意味である。「つまり理性が悟性使用に関係するのは，悟性に或る種の統一――即ち，それについて悟性はまったく何も知らないような統一の方向を措定するためである。そしてこの統一の旨とするところは，およそ対象に関する一切の悟性作用を総括して一つの絶対的全体にまとめるにある。それだから純粋理性の客観的使用は常に超越的である。」（[8]（中）p. 43）

(39) [5]，を参照。

(40) [30] 及び同著「訳者あとがき」pp. 244–5。また経済学の分野で意欲的に意味論に傾注したマッハルプ（F. Machlup）によれば，「20 年以上の間，私は学生に，広く用いられている『静学』と『動

学』という言葉のひとつの用法は，自分の仕事は批判標的となっている論敵の仕事とは違うと主張するものである，と言い聞かせてきた。つまり『静学』とは愚かな論敵が書いたものであり，『動学』とは著者自身のはるかに優れた理論だというわけである。」（[23] p. 31）サムエルソン（P. Samuelson）も「経済学の文献にあらわれる『動学的』および『静学的』という言葉は，多くの場合に良い・悪い，現実的・非現実的，単純・複雑，等の同義語として用いられているにすぎない。われわれは他人の理論は静学的であるとして責め，一方自分のものは動学的であると宣伝しがちである。この種の例はあまりにも多すぎるので引用する必要もなかろう。」（[31] p. 311　訳書 p. 324）と述べる。

(41)　形而上学的諸体系概念を構築する動機についてディルタイは，ボルノーによれば次のように説明する。「体系を構成する精神は，決して停止することはない。この精神は，世界と生の謎を，普遍妥当的な学問的認識の中で解明するという，形而上学的必要性に基礎をもつからである。」（[22] p. 182）そしてまたディルタイは形而上学について，「世界観が概念的につくられ，基定され，さうして普遍妥当性へ高められるとき，吾々はそれを形而上学と呼ぶ。」（[12] p. 103）

(42)　ウィーン学団の実証主義運動にみられるように現代の哲学運動の主流派の狙いは，「形而上学的なるもの」の哲学（科学）からの追放であった。しかしながらその反面，20 世紀の初頭においては，ドイツにおける生の哲学運動のように表面的には（というのもそのような運動も「実証主義」と銘打っているのである）実証主義からの離反と受け取られる流れも存在していた。この運動は，形而上学的なるものも経験的なるものと同様に現実でありそれを「生」との関連で捉え直そうという意図を有していたのである（例えば，ディルタイ，ドイツ西南学派―とくにヴィンデルバント，リッケルト―，フッサール，ハイデッガーなど）。「思弁的観念論の崩壊の後に経験科学に鞍がえした，あの時代の傾向にすっぽりはまっていた」（[22] p. 48）ディルタイが，「実証主義を超えて成長し」（[22] p. 49）た後，「世界の最終的な説明根拠は，事実性，純粋な事実性であるが，これは生の感情に結びついたものであって，その意味で偶然である。」（[22] p. 69）と主張するまでに変節したのである。またリッケルトは，「ヴィンデルバントの示教及び著書が，嘗ては深く実証主義に傾いていた余に対して根本的影響を憶うて感謝の意を表せねばならないのである。」（[27] p. 10）と謝辞さえ述べている。本論文の主張の一つも，形而上的なるものが我々の研究活動において現実的に大きな影響を有していることを指摘することにあり，そのために「形而上概念」という用語を使用した。

(43)　科学に寄せる想いも込めて，フロイド（S. Freud）は次のように述べた。「いわゆる身体的随伴現象，または無意識的なものこそ，本来的に心的なものではないか，と精神分析学は考える。そして心的なものはそれ自体として意識されないものであるという見解をとれば，この心理学は他の自然科学と同じレベルの科学になることになる。なんとなれば，この場合には心理学が取り扱う仮定も物理学や化学のような科学の場合と同じように，それ自体としては直接に認知することはできず，新しい概念を仮定しながら，ただそれを支配する法則を設定することにあるからである。欲望や心的のエネルギーなどという仮定的な概念も，物理学の場合の力，質量，引力などという概念と同じように，科学を豊かにしているもので，けっして精神分析という若い科学の苦肉の策ととるべきではない。」（[21] p. 40）ここでは，「法則」という用語を「鋼領」と言い換えるならば物理学においても同様である。

(44)「私どもの言いまわしとしては，『その現象は意味深いものだ』，『その現象には意味があるのだ』という形式で表現するほうが目的にかなっています。意味ということばで考えられているのは，意義，意図，意向および心的連関の系列のなかにおける位置づけなのです。」（[21] p. 119 頁）そして「解釈とは隠れた意味を見いだすこと」（[21] p. 146 頁）である。また「解釈は価値観を前提にしているのであるが，解釈者が受容している価値観と社会の価値観とが一致しているとき，解釈者は自己の価値観，つまり解釈に盛り込まている価値観にたいしては無関心である。逆に社会の価値観を否定しているとき，解釈者は価値観にたいして意識的である。この場合の解釈は目的志向的であるだろう。」（[17] p. 30）

引用文献

［1］ アリストテレス『形而上学』出　隆訳　岩波書店，（上）1959 年（下）1961 年

［2］ ウィトゲンシュタイン（Ludwig Wittgenstein）『ウィトゲンシュタイン　論理哲学論考の研究〔Ⅰ〕『解釈編』〔Ⅱ〕註釈編』末木剛博著　公論社，〔Ⅰ〕昭和 51 年〔Ⅱ〕昭和 52 年

［3］ ウィトゲンシュタイン（Ludwig Wittgenstein）『「哲学的探求」読解』黒崎　宏訳・解説　産業図書，1997 年

［4］ ヴィンデルバント（Wilhelm Windelband）『哲学概論』速水・高桑・山本訳　岩波書店，〔第一部〕昭和 11 年〔第二部〕昭和 11 年

［5］ 浦上博逵「概念体の構造―経済哲学のための構想―」（『城西大学大学院　研究年報』第 18 号　城西大学，2002 年）

［6］ 大森荘蔵『物と心』東京大学出版会，1976 年

［7］ オグデン=リチャーズ（Ogden, C. K., & Richards, I.A.）『意味の意味』石橋幸太郎訳　新泉社，1982 年

［8］ カント（Immanuel Kant）『純粋理性批判』篠田英雄訳　岩波書店，（上）1961 年（中）1961 年（下）1962 年

［9］ クワイン（Willard Van Orman Quine）『論理的観点から―論理と哲学をめぐる九章』飯田　隆訳 勁草書房，1992 年

［10］ 沢田允茂『現代論理学入門』岩波書店，1962 年

［11］ 竹田青嗣『はじめての現象学』海鳥社，1993 年

［12］ ディルタイ（Wilhelm Dilthey）『哲学の本質』戸田三郎訳　岩波書店，昭和 10 年

［13］ ディルタイ（Wilhelm Dilthey）『精神科学における歴史的世界構成』尾形良助訳　以文社，1981 年

［14］ ディルタイ（Wilhelm Dilthey）『世界観の研究』山本英一訳　岩波書店，昭和 10 年

［15］ ニーチェ（Friedrich Nietzsche）『権力への意志』原　佑訳（ニーチェ全集　第 12 巻）理想社，（上）昭和 37 年　（下）昭和 37 年

［16］ 西田幾太郎「善の研究」（『日本の名著 47　西田幾太郎』所収　中央公論社，1984 年）

［17］ 中尾訓生「梅岩思想について」（『山口経済学雑誌』第 46 巻第 4 号 山口大学，平成 10 年）

［18］ フッサール（Edmund Husserl）『イデーン　Ⅰ－Ⅰ』渡辺二郎訳　みすず書房，1979 年

［19］ ハイデガー（Martin Heidegger）「存在と時間」原　祐・渡辺二郎訳（『世界の名著 62　ハイデガー』所収　中央公論社，昭和 46 年）

［20］ フレーゲ（Gottlob Frege）「意義と意味について」土屋 俊訳（坂本百大編『現代哲学基本論文集Ⅰ』所収　勁草書房，1986 年）

［21］ フロイド（Sigmund Freud）「精神分析学入門」懸田克躬訳（『世界の名著 49　フロイド』所収　中央公論社，昭和 41 年）

［22］ ボルノー（Otto F. Bollnow）『ディルタイ―その哲学への案内』麻生　建訳　未来社，1977 年

［23］ マッハルプ（Fritz Machlup）『経済学と意味論』マートン・ミラー編　安場安吉・高木保興訳　日本経済新聞社，昭和 57 年

［24］ 村田純一「知覚，真理，実在」（野家啓一編『哲学の迷路―大森哲学・批判と応答―』産業図書，昭和 59 年

［25］ モリス（Charles W. Morris）『記号論の基礎』内田種臣・小林昭世訳　勁草書房，1988 年

［26］ リッケルト（Heinrich Rickert）『文化科学と自然科学』佐竹哲雄・豊川　昇訳　岩波書店，昭和 14 年

［27］ リッケルト（Heinrich Rickert）『認識の対象』山内得立訳　岩波書店，昭和 2 年

［28］ 山本　信『形而上学の可能性』東京大学出版会，1977 年

［29］ Ayer, Alfred J., *Language, Truth and Logic,*（2nd）Victor Gollangz Ltd., 1970　吉田夏彦訳『言

語・真理・論理』岩波書店，　1955 年

〔30〕 Robinson, Joan, *Economic Philosophy,* C. A. Watts & Co. 1962 宮崎義一訳『経済学の考え方』岩波書店，昭和 41 年

〔31〕 Samuelson, Paul, *Foundations of Economic Analysis,* Harvard UP 1947 佐藤隆三訳『経済分析の基礎』勁草書房，1967 年